

徒然なるままに…14 - 「M字大作戦」の秘密

運動会が終わって、1か月が過ぎようとしています。それぞれの学級では、本格的に授業が展開され、それぞれの学級のスタイルが確立されつつあるのではないでしょう。

さて、先日、教育センターの「小学校社会科授業づくり研修」にて、広島大学大学院の草原和博先生の講話を聞きました。この内容が本校の社会科授業づくりにおいて、大変参考になると思い、まとめてみました。この研修は、澤田先生、尾越先生も受講されていまして、お二人からも話を聞いてみてください。

「子どもの思考を伴う授業」の条件は、次の2点です。

1点目は、「なぜ。」と問うことです。社会内の事象のわけを考えることによって、社会の仕組みや法則を明らかにすることになるからです。

2点目は、一般的に（子どもたちが）認識している事象の上に、その認識がひっくり返る事象を提示することです。認識がひっくり返る事象とは、矛盾や意外性を持つ事象であり、これを提示することによって、思考が揺さぶられて、追究の切実性が生まれ、より高次に、より多面的にとらえることができるからです。

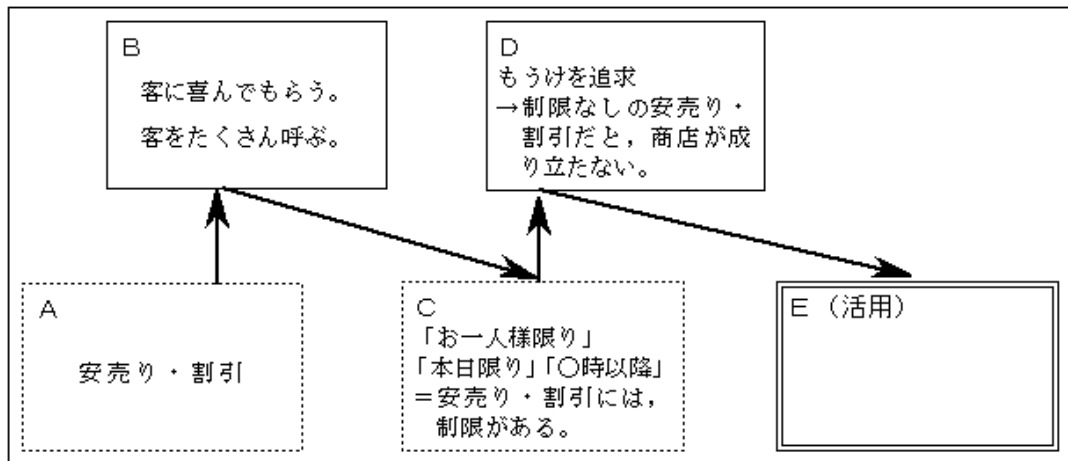
これらの条件を資料に示した第3学年「わたしたちのくらしと商店」の実践で説明してみましよう。

まず、スーパーマーケットの安売りや割引を取り上げ、「なぜ、スーパーマーケットは、安売りや割引をするのだろうか。」と問います。すると、子どもは、「客を喜ばせたい。」「客にたくさん来てほしいから。」と、商店の集客の工夫に気がきます。しかし、ここで終わってしまったら、商店は、子どもにとって他人事になり、今一步、商店（商業）の仕組みに踏み込めません。

そこで、安売りや割引には、「お一人様限り」、「本日限り」とか、「〇時以降」というように、制限があることに着目して、「なぜ、いつでも、だれにでも安売りや割引をしないのだろうか。」と問います。こう問うことによって、客のための安売り、割引なのに、制限があるという矛盾に気づき、考える必然性が生まれます。この問いから、制限しているわけを考えることを通して、スーパーマーケットは、もうけ（利潤）を追究することで成り立っていること、そのために集客していることに気付くことができます。こうすることによって、制限しないと、商店は、成り立っていかないというように、スーパーマーケットの立場で考えることができ、商店の仕事を経済学的に、より高次に、多面的にとらえることができるのです。これを図示すると、次ページのようになります。

一般的な事例(A)から、一般的な理論(B)を見出します。その次に、その事例をひっくり返す事例(C)から、新たな理論(D)へと高めます。そして、本実践にはありませんでしたが、この事象と理論を他の事例に当てはめて考えます(E)。このような学習展開を「M字大作戦」と名付けておられます。

思考は、これまでの認識や経験と相反する事象と出会うと同時に、「なぜ。」と問いが発せられるときから始まります。とすれば、そうなるストーリーで授業展開を考えれば、子どもは、自然と思考をするはずで、これが本校が主張している「問いを立てる」



意味なのです。

全体研・教科研に向けて、教材研究が始まっていることと思います。まず、取り上げたい教材と出会ってください。その際、今回述べた、常識を壊す事象が手がかりとなると思います。